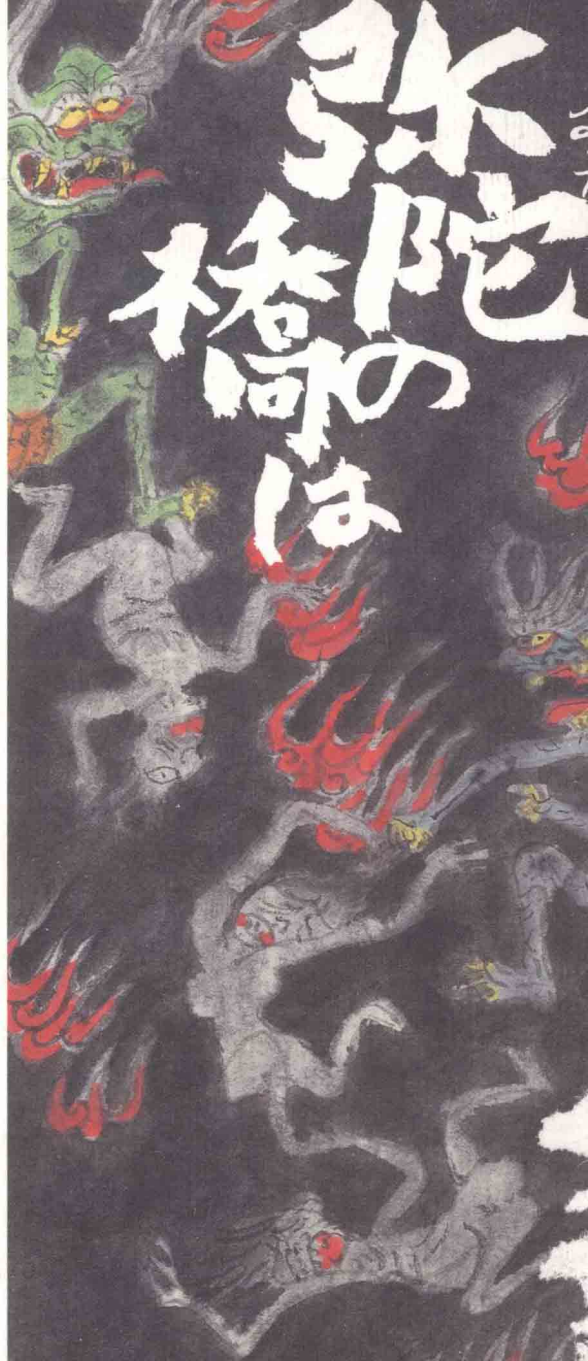


津本陽

親鸞聖人伝「上巻」

弥陀の  
橋向は

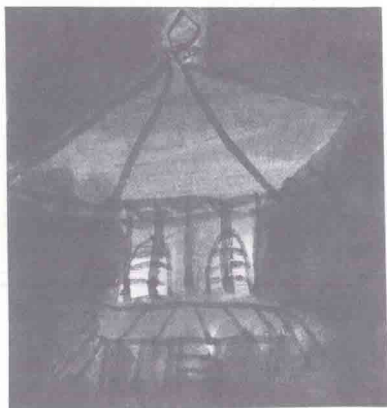


読売新聞社

津本陽

弥陀<sup>みだ</sup>の  
橋向は

親鸞聖人伝  
〔上巻〕



弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻

二〇〇二年(平成十四年)三月十二日 第一刷

著者 津本 陽

©2002, Tsumoto Yo

編集人 横山 孝

発行人 小島 敦

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―一 〒100-8055

大阪市北区野崎町五―九 〒550-8651

北九州市小倉北区明和町一―一―一 〒830-8651

名古屋市中区栄一―一―七―六 〒460-8650

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

弥陀の橋は 上巻 目次

六角堂	5
吉水	68
本願に帰す	135
非僧非俗	192
越路の風	265
関東へ	337
光輪	394

装画·题字 村上 豊

装订 熊谷博人

弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻



## 六角堂

遠近でしきりに鶯の声がしていた。啼きかわす雌雄のさえずり。たどたどしい仔の啼き声を稽古させるため、親鳥が呼びかける。ひよどりの啼き声もするどくひびく。

落葉樹の若葉が淡く陽ざしに映え、絹のようにやわらかな風が吹くとき、ひそやかに語りあうように、ある一群は左へなびき、他の一群は右へなびく。建仁元年（一一三二）四月はじめの早朝であつた。

ひとりの僧が比叡山横川の常行堂の裏戸をあけ、まだ薄く霧ののこっている木蔭の道へ出ると、堂宇にむかい手をあわせ、立ち去つてゆく。黒衣の背に、ちいさなつづらを負い、塗り笠を手にしていた。

僧の名は範宴はんえん、横川の源信げんしんの流れをくむ、不断念仏衆として、九歳から二十年間を過ごしてきた堂僧であつた。



堂僧は、延暦寺の寺領を武力で守護する荒法師の堂衆とはちがう。

不断念仏衆には、導師、僧綱、凡僧、堂僧という階級がある。

範宴は貴族の出身であった。比叡山では、出家した貴族の子息に「君名」という通称をつける。範宴のそれは少納言公であった。

範宴は洛外日野（伏見区日野）に領地を持ち、法界寺を氏寺としていとなんでいた、日野有範公の長子として、承安三年（一二三三）に生まれた。

母は源氏の娘、吉光女であったという伝承があるが、たしかではない。

家系はつぎの通りである。

「大織冠藤原鎌足の五代の孫、近衛大将右大臣従一位内膳公の六代の子孫、弾正弼であった有国卿の五代の孫、皇太后宮大進有範の子」

日野氏は、のちに足利尊氏がひらいた室町幕府では、強大な権勢を誇り、裏松、柳原、烏丸、広橋の分家とともに繁栄したが、有範の代には、家運がさかんではなかった。

有範の父経尹が、阿波権守という役職についたが、「放埒人」として、貴族社会になじまない勝手な行動をしたため、三人の息子は苦勞をすることになった。

だが、長兄範綱は後白河法皇に仕え、若狭守に任ぜられた。次兄宗業は文章博士、従三位式部大輔に任ぜられた。

末弟の有範だけが、皇太后宮大進という、従六位ほどの役職に甘んじ、その後は退官出家させ

られたといわれる。

しかも範宴以下四人の子息がすべて出家したので、有範はなにか事情があつて失脚したと推測されている。

範宴の母君が早逝したといういい伝えもある。岡崎市舳越願照寺にある、三幅の『親鸞聖人御絵伝』の第一幅に、母君がわが亡きあとを弔ってほしいと、範宴に遺言をしている場面が描かれている。

立派な座敷に屏風をひきまわし、四布布団よのふに身を横たえている女性が、枕もとに坐つた幼い範宴の頭を撫でるように手をさしのべている。三人の侍女のひとりには、袂で顔をおおつて涙をおさえ、ひとりは女性の足をなでさすり、ひとりは薬湯を運んでいる。

わびしさのただよう絵から伝わってくるのは、衰運に陥つた日野家の日常である。

日野有範が失脚したのは、治承四年（二八〇）、平氏一門が後白河法皇を幽閉して院政を廃し、政権をたてたのを憤つた第二皇子の以仁王もちひとおうが令旨を発し、諸国の源氏に挙兵を促した事件に関係していたためであるといわれる。

源氏で最初に挙兵したのは源頼政よしみまさであつた。興福寺の勢力をたのみ、奈良にむかおうとした以仁王と頼政は、宇治川の合戦に敗れ、討ち死にを遂げた。

以仁王は宇治から逃れ、奈良へむかおうとして、平家の軍勢に追いつかれ、五十騎ほどの手兵とともに、三百騎の敵と死闘を展開した。

力つきた以仁王が討ちとられたのは、相楽郡綺田かほたの河原（京都府相楽郡山城町）に近い、光明山寺の鳥居のまえであつた。

このとき以仁王を迎えるため出陣した南都興福寺の僧兵七千余人は、綺田から二十町（約二キロ）ほど木津まで迫っており、いましばらく持ちこたえれば、形勢は逆転したのであつたが、不運の最期であつた。

平家の侍たちは、討ちとつた首級をたずさえ、京都にひきあげたが、生前の王を知る者がいないので、生死の確認ができない。

有範の次兄宗業が、以仁王の学問の師をしていたので、呼び出され、首級を実検して王であることを確認した。

その後、疑いぶかい平清盛が、宗業、有範の身边を執拗に探索したのは当然のなりゆきであつた。

京都では以仁王が生きて奈良にいるという風説がひろまり、人心はおおいに動揺した。

範宴は本来であれば、殿上人の子として、朝廷、仙洞せんとうに出仕し、貴顕の道を歩むべきであつたが、平家の追求を避けるため、仏門に入り、そこでも陽のあたらない場所をあてがわれることになつた。

二十九歳の範宴は足な草鞋わらじをはき、湿つた土を踏み、大股に歩いてゆく。

山道の左手の谷に密生する灌木の梢越しに、ときどき暗い色をたたえた琵琶湖の湖面が見え

る。

視界がおおきくひらけると、西坂本に密集する人家の屋根の起伏が、あざやかに浮き出るよう  
にあらわれた。町屋は間口一間か二間の長屋である。板葺きの屋根に横木、石を置き、おさえて  
いる。

壁は土壁、板壁、網代壁で、隣家の話し声が筒抜けに聞こえる。入り口には半部の窓がある  
が、家内は昼間でもほの暗い。火事になれば、そのような長屋が幾百軒と燃えるのは、またたく  
うちである。

赤斑瘡あかあしがきと呼ばれるはやり病が流行する夏は、間近であつた。ほかにも疱瘡、麻疹はしか、咳病がいびよう、咳がい、  
逆病ぎやくびょうと呼ばれる流行性感冒、瘡病おこりやまいと呼ぶマラリヤ、痢病がある。

これらの病気は怨霊のしわざと見られ、貴族たちは病気になるとまず悪霊の調伏祈禱をたの  
み、つぎに医師くすしを呼ぶ。

現世の人は際限もなく争いをおこし、子孫に悪因縁をのこして死んでゆく。

範冥は、眺望のひらけた場所にしばらくたたずむ。薄雲の覆われた空を通してくる陽射しはま  
だ暑気をとまわず、さわやかであつた。谷あいから、念仏聖ねんぶつせいと呼ばれる遁世行者とんせいぎやうの称名念仏  
の声が聞こえてくる。

範冥はこれから雲母坂きらくらざかを下り、京都東山大谷の吉水よしづみにある法然房源空ほうねんぼうげんくうの庵室をたずねる。

——私は聖徳太子の霊告によって、後世ごせを助けて下さる上人にお目にかかり、み教えをうけよ

う。納得すれば上人の弟子となり、比叡の山には帰らぬ――

山内の谷あいの念仏別所に集まり、念仏往生にはげむ隠遁者は『梁塵秘抄』にうたわれている。

へ山寺おこなう聖こそ　あわれに尊きものはあれ　行道引声阿弥陀経　暁憊法釈迦牟尼仏  
範宴はまだ念仏聖のような境地に安住できない。生死しやうじの道をきわめるため、さまざまの疑問が身内にわだかまっていた。

範宴は、九歳の春、師とえらんだ慈円じえんの住む白川房で得度をしたときの光景を思いだす。慈円は右大臣九条兼実かねざねの実弟で、このとき二十七歳、千日回峰行をすでに達成し、次代の比叡山を代表する俊英として知られていた。

白川房は、師の覚快かくかい法親王ほうしんのうから譲られたものであった。

桜の季節であった。

白川房の檜皮葺ひわだぎ四脚門をはいると、立烏帽子たてえぼしをかぶり、狩衣をつけた家人けにんが、範宴の伯父範綱卿が馬から下りるのを、大仰に腰をかかめて迎えた。

範宴には、その男の丁寧な動作が見せかけだけで、慈円の威光をかさにきて、わずかな供回りを連れておとずれた自分たちを、内心で軽んじている様子を、感じとった。

白川房は贅沢な住房で、踏むと足がすくむような紋縁もんべりの青畳が敷きつめられていた。

縁側には勾欄をめぐらし、侍僧、稚児がひかえている。

範宴は上座の畳に坐っている慈円に挨拶をするとき、うしろにいる衣冠をつけた肥りじしの範綱卿に力づけられた。

「ともに藤原氏の血をひく慈円殿を師といたし、発心得度するそなたはしあわせ者じゃ。とくとお頼みしやれ」

慈円は低頭する。

「よろしゅう仏道にお導き下されませ」

慈円は、笑って応じた。

「比叡に登らば、この慈円がそなたの父御ととににかわるものなれば、何事も遠慮はいらぬ。頼って参るがよい。伯父御のもとで俗典を習うておるであらうゆえ、円宗（天台宗）の教えを学ぶに何の苦もなきはずじゃ」

慈円は以仁王の師であつた伯父宗業と、親しい間柄であつた。

範宴は三人の僧に囲まれ、板敷に手をつく、両側の僧が紙燭しきろうをかざし、まんなかの僧が慣れた手つきで、磨ぎすました剃刀で、稚児髪を剃りおとしてゆく。

膝もとの紙のうえに落ちてゆく頭髮の束を、範宴はたそがれどきの淡い光のなかで見つめていた。

天台宗は、いまから千四百年ほど昔、中国江南で成立した宗派で、創始者は南朝貴族の血をひく智顛ちでんである。

戦乱の時代に生まれた智顛は、流浪をかきねるうち、「天台三大部」といわれる『法華文句』十卷・『法華玄義』十卷・『摩訶止観』十卷の著述をまとめた。

三書は『法華経』の解釈書である。『文句』はその註釈、『玄義』はその原意、『止観』はそれにもとづく実践法を論述したものであった。

範宴は智顛の教学を修め、空・仮・中の三観をおこなった。

仏教の根本思想は、現世のすべてがむなしいと見る。これを「空諦」という。だが、空を見きわめるうち、それに考えが固着しては現実を忘れるので、極端に走らないようにするのが「仮諦」。だがそれに固執すると現実に傾く。否定と肯定、空と仮を超越した中道をとる見方が「中諦」であった。

範宴が出家した当時、師の慈円は政治的にきわめて不安定な立場にいた。

慈円の師は延暦寺三門跡のひとつである青蓮院の二代、覚快である。彼は鳥羽法皇の第七皇子で、「七宮」と呼ばれていた。

青蓮院は院政と密接なつながりを持っている。治承元年（二七）夏、後白河法皇の近臣たちがくわだてた、法勝寺執行俊寛の山荘における鹿ヶ谷の平家討滅の密議が発覚し、謀議に参画した者は斬罪、遠島の処分をうけた。

平清盛は、このうち京中に禿髮三百人を放ち、敵対勢力を探索し、弾圧を徹底させた。

禿髮とは十四、五歳から十六、七歳までの童部を集め、髪を首のあたりで切りそろえおかつぱ

頭にして、赤い直垂ひたなれを着せた密偵である。

禿髪たちは梅の枝でつくったむちを持ち、昼夜京中をめぐり歩き、清盛の威光をかさにきて、横暴のふるまいをする。善悪をたしかめることもなく、私情にまかせ、さまざまのことを清盛に報告した。

このため、数も知れないほどの人々が無実の罪をうけた。町びとは禿髪にゆきあうと、あわてふためき、道を選じた。

慈円は鹿ヶ谷事件のあと、真言阿闍梨あざりの地位をなげうち、隠居したいと兄兼実にししばし申し出ていた。わが身にわざわいが及ぶのを怖れたためである。

清盛は治承三年十一月、関白松殿基房まつどのもとむね以下、後白河院の近臣四十人を解任し、さらに子の宗盛に軍兵を預け、院御所を襲わせ、院政を停止させたのち、後白河法皇を鳥羽殿に幽閉した。

慈円は、清盛の弾圧を怖れるあまり、治承四年十一月に京都西山の善峯寺（京都市西京区大原野町）に移った。師の覚快の身辺に、危険が迫っていたためである。

慈円は治承五年二月、覚快が重病の床だったので、師のもとに帰ったが、六月下旬には、近江国葛川（大津市葛川坊村町）に参籠するといひ、京都を離れた。

範宴が白川房で出家したのは、慈円がその年のうち京都にいた、ごくみじかい期間のあいだであつた。

覚快は同年十一月に亡くなったが、比叡山上の青蓮房を慈円が相続したのは、平家が西国に落



ちてゆき、木曾義仲が入京した寿永二年（二二六）七月末であった。

このように、情誼にうすかった慈円と範宴の交流は、やはり淡いものであったであろうと想像できる。

範宴は、出家してのち常行三昧堂で、不断念仏をおこなう月日を過ごした。

比叡山は標高八四八メートル、冬期は零下十度以下になり、水が凍ってしまうので山上での生活は苦難をきわめる。

西塔の西南、南尾谷にある常行堂は、法華堂と廊下でつながれ、「荷にない堂」と呼ばれていた。

その辺りは盛夏でも陽のあたる時間はわずかで、湿気がきわめてつよい。食物は菜葉さいよう、大根、人参などで、体に脂肪が溜りにくいが、霧がたちこめていたかと思うと、たちまち晴れてくる山の気象では、洗濯物も乾きにくく、かびがつく。

労咳ろうがい（結核）にかかりやすい体質の僧は、三、四年のうちに発病するといわれていた。幼い範宴は、そこで勉学、修行をした。

寺内の戒律はきびしい。何事をするまえにも経きんを誦とよえる。朝粥をとる時間は、その前後の経を誦する時間の何分の一かでおわる。

京都の町へ下りるのは、二・五キロほどの坂道を三十五分ほど辿ればよいといわれている。上りは一時間半ほどで、当時その参道は、駆けくんだり駆けのぼってくる僧侶、小僧の足で踏みかためられていた。